

展示室1 「新収蔵作品を中心に」 パネル 1/5

新収蔵作品を中心に

徳島県立近代美術館では、人の形に注目し、人間像をテーマにした作品を収集しています。

今回は、昨年度新たにコレクションに加わった、黒川弘毅や福田美蘭など現在も精力的に活動する作家のほか、山下菊二や原菊太郎など徳島ゆかりの作家の作品を、既収蔵作品や関連作家の作品とともに展覧します。

*会期中、展示替えを行います。

Focused on the new collections

The Tokushima Modern Art Museum has collected artworks on the theme of the human figure.

In this exhibition, you can see the new collections, the works by Hirotake Kurokawa, Miran Fukuda who are still active today, Kikuji Yamashita, and Usaburo Ihara who are associated with Tokushima. We will show you the new collections with the previously collected works and the works by the related artists.

*A part of this exhibition will be changed during the exhibition period.

展示室1 「新収蔵作品を中心に」 パネル 2/5

人間は五感の中でも特に視覚を重視し、眼に映るものをそのまま真実と捉えがちです。しかし、視覚はいともたやすく私たちに欺き、混乱に陥れます。見誤り、見落とし、思い込みによる錯覚などは日常茶飯事です。ここでは「視点のずらし」、「多視点」をキーワードに、写真表現を利用したスーパーリアリズムの作品、古典絵画を引用した作品を紹介します。

三尾公三は、透視図法を用いて巧みに遠近や視点を^{ひず}歪ませた虚構の空間を作り出します。〈女と風景〉は、女性の身体が意図的に^{ゆが}歪められており、ポピュラーでありながら特定の個人とは結びつかない詩的な雰囲気漂う画面を構築しています。

福田美蘭は、古今東西の名画や時事問題を題材に、固定観念を覆すようなユニークな作品を生み出す作家です。新収蔵の〈ぶれちゃった写真(マウリッツハイス美術館)〉はフィルムカメラの手ブレ画像に触発された作品で、敢えて不鮮明な画像を用いることで「名画とは何か」と改めて問い直しているようです。

このようなクールな視点はフランスの画家、エドゥアール・マネの〈笛を吹く少年〉を下地にした森村泰昌の作品に通じます。ここで森村は画中の少年に扮することで、自らを名画のように観られる対象へと変化させています。作品を観る、観られるという一方向的な鑑賞のあり方に一石を投じているのです。

“自分ではない何者か”に扮装するセルフ・ポートレイトの作家、シンディ・シャーマンや澤田知子は、自らを客体化し虚構の役割を演じることで、従来の女性像の見直しを図っています。

20世紀美術の巨匠、パブロ・ピカソは、描く対象を多視点から捉え直すキュビズムの手法を用いた先駆者です。今回は、1930年代に描かれた作品を4点展示します。

1920-30年代の西欧の美術界は、撮影可能コーナーに展示中のジュール・パスキンを始め、出身国や画風も異なる画家たちがパリを拠点に旺盛な創作活動を展開するエコール・ド・パリの全盛期にありました。この時期、パリに留学した日本人画家に板東敏雄や高崎剛、そして伊原宇三郎がいます。伊原はむしろそうした喧騒に背を向け、古典絵画の研究に没頭していきました。伊原の作品については展示室2において公開しておりますので、こちらも合わせてご鑑賞ください。

展示室1 「新収蔵作品を中心に」 パネル 3/5

徳島出身の画家、原菊太郎と幸田春耕・暁冶父子の新収蔵作品や資料と、関連作家による日本画の作品を展覧します。

原は、戦前戦後を通じて徳島の美術界で強い存在感を示しました。新収蔵の〈群魚図屏風〉には、様々な種類の魚の一群に四季折々の草花、さらに山脈など様々なモチーフが配されています。一定の構想があって描き始めたというよりも、連綿とわき上がるイメージを自由に、そのまま描き留めていったようで、作家の人柄をも偲ばせるような遊び心のあふれる伸びやかな描写が印象的な作品です。

一方、福島県出身で、主に農山村で働く人々を主題とした酒井三良の〈にわか雨〉は、急な雨で籠が濡れないよう、番傘を手に急いで戸外へやってきた様子の女性を捉えています。女性と同じように屈み込むような姿勢を取る家鴨^{あひる}が愛らしく、市井に暮らす庶民の素朴な生活感が滲^{にじ}んでいます。枇杷の実が見えることから、梅雨時の季節なのでしょう。こうした自然の景物に対する作家の温かなまなざしは、〈群魚図屏風〉にも見て取れます。

幸田春耕・暁冶父子はともに京都に学び、後進の徳島の日本画家たちに大きな影響を与えました。京都画壇の巨匠、池田遙邨は春耕と画塾・青塔社を運営し、暁冶に日本画を指導したことから、父子二代にわたり深い交流を結びました。池田家から春耕、暁冶宛に送られた葉書や封書は 160 通にも及びます。

今回収蔵した春耕、暁冶所用が用いた画材の中には、日本画のマチエールに革命をもたらした画用ナイフが 8 本含まれています。暁冶は戦後、余白の空間によって余韻や精神的な奥行きを感じさせるようなそれまでの花鳥画とは打って変わり、余白を否定するかのように動植物を画面いっぱい描くようになります。その際、ナイフで絵具を激しく削り取り、引っかくかのような荒々しい手法を多用しました。春耕にあっても戦後、薄く絵具を塗り重ねる伝統的な彩色法ではなく、絵肌を盛り上げるように厚塗りで描く表現に移行します。二人は「新しい日本画」をめぐる、時に対抗心を燃やしながらかそれぞれの表現を模索していたのかもしれませんが。

この他、幸田父子に刺激を受け京都画壇で活躍した徳島出身の画家、市原義之の作品も展示します。

展示室1 「新収蔵作品を中心に」 パネル 4/5

戦後日本において、米軍基地やダム建設など政治ないし社会問題の現場に赴き、現地の労働者や土地収用に苦しむ農漁村の人々に取材したルポルタージュ絵画を描いた作家たちに着目します。

敗戦直後の日本では、食糧不足等で生活に困窮する人々が続出し、様々な民衆運動が展開されていました。そうした中で 1947 年、新時代に即した美術のあり方を志向する美術団体、前衛美術会が組織されます。これに加わった山下菊二、尾藤豊ら同会の一部のメンバーは 1952 年、米軍基地が使用する電源の供給源とされたダム建設に反対する小河内村文化工作隊に参加しました。翌年には、このような課題に向き合い平和を希求する若者たちが連帯し、青年美術家連合を結成。その中には当時、20 代前半の池田龍雄、中村宏も含まれていました。

尾藤の新収蔵作品、〈顔のある風景2〉を見てみましょう。画面中央に配された異様な人体の周囲には、豊漁を祝う大漁旗や船を繋ぎ止めるための杭などがあることから、港の風景が描かれていることが読み取れます。とすれば、この人体は戦後の復興の陰に取り残されつつあった漁村の人々を表しているのでしょう。権力に翻弄される人間の存在を捉えようとした尾藤の 1960 年代の作風がよく現れた 1 点です。

山下の〈筑豊炭田地帯〉には、労働者を思わせる人体が“ボタ山”（石炭採掘時の廃棄物が堆積してできる人工の山）から、口を大きく開く鳥や無数の眼球など、奇怪な光景を望む場面が描かれます。本作はこの時期の山下の労働運動への関心を示すとともに、鳥や眼球は、表現者の一人として社会の現実から目を背けまいとする固い意思を表明しているかのようです。〈黄泉を識る^{かぐろ} 梟〉において、こちらをじっと見据える梟とその背後で不気味に微笑む異形の人の描写にも、山下の“人間”に対する鋭い省察が伺えます。

〈安宅・阿波木偶〉は、山下の実兄で、阿波木偶人形など徳島の風物に取材した作品を多く手がけた谷口董美の作品です。谷口は山下を美術の道へ導き、後年まで良き理解者であり続けました。谷口が描いた戦死者の遺影を山下がコラージュした合作〈取りに来られなかった肖像画〉のシリーズ 2 点とともにご覧ください。

展示室1 「新収蔵作品を中心に」 パネル 5/5

黒川弘毅は、ブロンズ鑄造で通常行われる型取りを行わず、直接手で掘った形にブロンズを流し込む方法をとる彫刻家です。その黒川が、初めて人型をテーマに手がけた〈Eros〉シリーズの作品3体が、一堂に会します。

両手を水平に伸ばし、正面や左右に身体の重心を傾けるようなユニークな造形には、作品本体の高さ1メートルに満たないサイズと相まって、まるで幼い子どもが思い思いに好きなポーズを取っているかのような愛らしさがあります。しかし、白銀色の艶やかな像の背面に回って見ると、熱で溶けたブロンズが冷えて固まることで黒く変色し、ざらついた部分が剥き出しになっており、全く違った印象を受けます。

黒川は、彫刻家の仕事とは、外部にある存在がこのように現れたいと望むような形を生み出すことであると語っています。そして、古代ギリシャの哲学者、プラトンの『饗宴』を引きつつ、〈Eros〉とは神々と人間の間存在的存在ーダイモーンであり、神々の精妙な身体と人間の揺らぐ情念を兼ね備えた存在であると説きました。人型の制作に込められた黒川の思考は、私達を深遠なる美の世界へと誘うかのようです。人間の魂を“影”を手がかりに表現した福嶋敬恭の〈SOUL〉とともにご覧ください。

展示室1 「現代版画」 パネル 1/3

新収蔵の版画1

第二次世界大戦後、海外の新しい美術の潮流が日本に紹介されるようになると、公募による美術団体が各地で強い影響力を持ち始めます。このような中で自由と独立の精神を掲げ、1951年に大阪で誕生したデモクラート美術家協会の磯辺行久や池田満寿夫、吉原英雄らは、いち早く版画の制作に臨みました。

1957年より開催された東京国際版画ビエンナーレ展は、海外版画の最新の動向を紹介するとともに、清新な表現を模索する版画家の台頭を促す場となりました。1960年代に入ると、版画家以外にも、現代美術の表現手段の一つとして制作に取り組む作家たちが現れます。

特筆すべきは、同ビエンナーレの第6回展に際し、横尾忠則が手がけたポスター（第6回東京国際ビエンナーレ展）が、そのデザインの奇抜さにより話題をさらい、当時、新進のデザイナーであった永井一正の作品が受賞を獲得したことから、デザイナーの存在に一躍注目が集まったことです。印刷によるデザインと版画作品との境界はどこにあるのか、という点が、議論を呼びました。

版画とは、版表現とは何か。それぞれに試行を重ねた1960年代前後の作家たちの作品を展示します。

展示室1「現代版画」パネル 2/3

新収蔵の版画2

1970年から80年代にかけて、版画は製版技術の飛躍的な向上とともに多様な版表現を習得した作家が国内外で活躍するに伴い、現代美術の主要なジャンルとして注目を集めることとなりました。

この頃、エンブレイビングやエッチングなど伝統的な手法を用いて、精細な線と色彩の明暗を表現する作家たちが現れます。ここでは、そうした作品に着目します。

柄澤斎の作品2点は、作家の50作に及ぶ〈肖像〉シリーズに含まれるもので、モデルの上半身像が克明に、柔らかな線で捉えられています。

久保卓治の作品4点は、作家が当時暮らしていたロンドン市街の風景を濃密なタッチで描写しており、洗練された都会の雰囲気がよく伝わってきます。

吉田勝彦の銅版画集〈森〉は、作家の作品の中で最もサイズが大きいシリーズで、木々の葉のさざめきや枝ぶりまでもが細やかに表現されています。一方の〈隅田川河岸〉は〈森〉とは対照的に都市風景を題材にした作品で、橋や船着き場、ビルなどの人工の建造物が力強い線で描出されています。

80年代の具象的な版表現の魅力をお楽しみください。

展示室1 「現代版画」 パネル 3/3

新収蔵の版画3

1980年から90年代の版画は、写真や映像の技術を取り込み、画面も大型化するなどさらに多様な展開を見せます。

杉山晶子は、水面のさざめきや泡、煙といった事物の動きの一瞬に、創作のインスピレーションを得る作家です。桃やチューリップを捉えた〈Imperfect Knowledge〉シリーズの作品は、時間の経過とともに腐り、あるいは花開く様を想起させる点で、映像的であるとも言えます。

光の輪が回転しているかのような〈in-spirals I〉では、実際に目に見えるフレームー作品の画面の枠外にも、イメージを拡張しようとする作家の意図が汲み取れます。このようなインスタレーション的な傾向は、それまで小画面での表現に留まっていた既存の版画の定義を打ち破るものです。

絵具による「塗り」を強調した絵画的な作風と版表現を組み合わせた原陽子にも、同様の志向が認められます。

また、浮世絵摺師と協働し、多色木版画を創作した黒崎彰も、紙の造形やビデオアートなど幅広い領域で活動し、その後は太古の風景を思わせるような原初的なイメージを追求しました。

版画と他ジャンルとの境界をなくそうとするかのように、自由な発想で制作に取り組んだ作家たちの表現にご注目ください。

展示室 2 「徳島ゆかりの美術」 パネル 1/1

徳島ゆかりの美術

当館では、徳島に縁がある作家の作品や、徳島の風景や風物に取材した作品を収集しています。今回は、伊原宇三郎と森堯之の新収蔵作品を、既収蔵作品と合わせて展示します。

伊原は東京美術学校を卒業後、1925年に渡仏し、5年の歳月をかけてパリを拠点に本場の西洋美術を学びます。ここでは、西洋の名だたる作家の中でも伊原が特に強い関心を寄せたピカソの静物画を模写した作品や、戦後、欧州や日本各地を旅行した際に手がけた風景画などをご紹介します。

シュルレアリスムの新進作家として注目を集めていた森は、前衛美術が弾圧を受けていた時代にあつて、新たな表現を模索していました。夫人の実家があつた中国の都市、大連に滞在していた1942年前後に描かれた作品は、いずれも写実性を強く意識しています。これらは、戦時下の森の活動を考える上で貴重な作品群であると言えます。

※会期中、展示替えを行います。

Art and Artists Associated with Tokushima

The Tokushima Modern Art Museum has collected artworks by artists associated with Tokushima Prefecture and on Tokushima's landscapes and subjects unique to the area.

In this exhibition, we display the new collections by Usaburo Ihara and Takayuki Mori with previously collected their works.

After Graduating from Tokyo Fine Arts School, Ihara went to France to learn the Western art in 1925, and lived in Paris for five years.

We show the reproductions of the still-life paintings by Pablo Picasso whom Ihara was strongly interested in among Western famous artists and the landscape paintings that Ihara drew traveling to various parts of Europe and Japan after World War II.

Mori attracted attention as an emerging artist of the surrealism. He explored the new expression in the

times when Avant-garde art was suppressed.

The works drawn in around 1942 when he stayed at his wife's family home in Dairen (city of China) have a strong sense of realism. These are so valuable for considering the activities of Mori during the war.

※ A part of this exhibition will be changed during the exhibition period.